

陳舜臣さんを語る会通信

NO.142 Sep. 2025

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2025年9月1日

月刊『神戸っ子』10号(1961年12月号)掲載「沈んだ欲望」

陳舜臣さんは、1961年8月、「枯草の根」で第7回江戸川乱歩賞を受賞しました。陳さんのこの年の著作には、集英社『陳舜臣中国ライブラリー30』『年譜』によると、「狂生員」(『宝石』10月号)、「回想死」(『講談倶楽部』12月号)、「厨房夢」(『新週刊』12月7日号)があります。この3作はいずれも短編で、のち、『集外集』に収録されました。

この年の小説は、ほかにもあったのです。月刊『神戸っ子』10号に、短編「沈んだ欲望」が掲載されています。その後、この作品は、短編集に収録されることはなかったと思われます。服部プロセス(株)神戸っ子出版事業部様のご許可を得て、ここに掲載させて頂きました。



月刊『神戸っ子』10号表紙

沈んだ欲望

陳舜臣
え・松本 宏

「浅田さん、大丈夫かね？」伊藤はなんべんも繰返した言葉を、また口にした。

「大丈夫だよ」浅田はきかれるたびに、愛想よく、あかるい誠実な声で答えた。

道らしい道もなく、まわりの樹が途方もなく大きいやつばかり。地面ははじめじめて、薄気味がわるい。はじめての人は、このあたりを人跡未踏の土地と思ってしまうらしい。

「浅田君はこの山の主(ぬし)だぜ。まかせときや万が一にもまちがいはねえ。安心しな」

首に巻きつけたタオルの端で顔を拭きながら、江原が言った。その語調は、臆病な伊藤をからかっている、と受けとれないこともなかった。だが伊藤は、そんなことに気をまわす余裕はないらしい。

遭難——という言葉が伊藤の頭のなかで、さきほどから跳びはねている。こんな道を、ほかの人間がかって通ったというのか……信じられないことだ！リーダーの浅田はゆっくり構えているが、体面上そうしているにすぎないのかもしれない。墜落間際の操縦士は、乗客を混乱させまいと、懸命に最後まで落ち着き払ったふりをするときいたが……。

巨木の群れはわがもの顔に天におかって聳え、低いところでは、太古を思わせる羊歯類が、所せましとばかり生い茂っている。植物の世界である。こんなところならたとえ百年前に人間が通っても、そのにおいがまだ残っていそうに思えた。それなのに、そんなにおいはちっともしないのだ！

「二十分ほど行くと、急にひらけた所へ出る。そこを抜けるとちよつとした難所があるけれど、なかに、時間にして五分ばかりですむんだ。そうだな、道幅は一尺ぐらいで、左手は切り立った岩、右手は深い谷、断崖絶壁というところだな。しかし眺めはすばらしい。眼下はるかに、清溪が白い泡を立てて流れている。岩の恰好もおもしろいね」

浅田は同行の二人に説明した。

「なかなかしゃれた所らしいな」

そう言って、江原は機嫌よく笑った。

伊藤は江原の笑いに釣られて、顔面の筋肉をうごかしかけたが、それは忽ち凍りついてしまった。

「笑い」ではなく「恐怖」をマスクに彫ったような顔になった。ダンガイゼツペキという言葉が、植物世界の奥底から、卑小な人間を嘲笑するかのようにつつまれてきこえた。伊藤は頭がくらくらして、登山に來たことを、あらためて後悔したのだった。

しかし浅田が言ったとおり、広いところ、すなわち巨木の魔手の及んでいない場所に出たとき、伊藤はホツと息をついた。

妙な顔をしたのは、浅田であった。

「あれはなんだろう？」

浅田の指さす方向に、伊藤と江原も目をむけた。屏風のような赤い岩肌の壁が左手をさえぎっている。その根もとに黒々としたものが堆と積まれているのが見えた。

浅田がまっ先に駆け出した。彼は途中でふりかえって、

「飛行機の残骸だよ。遭難したらしい」

ソウナンという言葉が、またしえも伊藤の脆弱な神経をおびやかした。

「ほほう、まだかすかに煙があがっているぜ。遭難していくらも経っていねえな」

江原が小手をかざして言った。

「沈んだ欲望」(続)

「生存者がいるかな？」浅田は足を早めた。浅田は目的物のそばに着いた。

「旅客機じゃない」彼はあとから来た二人に自分の意見を述べた。「そんなに大きなやつじゃない。小型の飛行機だ」

黒焦げの残骸は案外つつましか量しかなかった。

「ヘリコプターかな？」と江原が呟いた。

「そうじゃない」浅田は自信ありげに首を振った。

「ヘリコプターよりは大きい。飛行機にはちがいないさ。一人乗りとか二人乗りてのがあるだろう。そんなやつと思うね」

まだ余燼のくすぶっている黒い物体のまわりを、浅田はぐるぐるまわって点検していたが、やがて立ちどまって、「生存者なし」とおごそかな声で言った。——「どうやら一人乗りらしい。遺体はここに一つしかない」

江原はそこへ走って行った。伊藤はうごかなかった。うごけなかった。

「焼けていねえな。や、それにこりや外人だ。アメリカの軍用機かな？」と江原が言う。

「きつと墜落したはずみに、ほうり出されたんだ」と浅田が説明する。「ほら、機体からだいぶ離れているだろう。すごい爆風で飛行服なんか剥がれちまっている。ほら、そこにちぎれたきれ端がある」

伊藤は寒気がしてきた。がくがく顫えている彼の足もとに、飛行服の断片、それもあり大きいのが、なかば草にかくれているのが見えた。

「あつ！」と彼は思わず悲鳴をあげた。

「どうした？」と浅田が近づいて来た。伊藤は物も言えず、ただ足もとを指すばかりである。彼の脛はむなくピクピクうごいた。

浅田はいたまじそうにそれを見て、「ああ、ここにもあるのか……」と言った。

江原もやって来て、かがみこんでそれに手を触れた。

「これは襟の一部か……や、胸のポケットあたりまであるぞ。ポケットになにかかたいものが入っている」

江原はそれを取り出した。銀色の小さなケースだった。

「シガレット・ケースかな？」と言って、彼は蓋をあげた。

「おっ！」あけた江原だけではなく、のぞきこんだ浅田も伊藤も、同時に声をのんだ。

「ダイヤモンドだ！」江原が叫んだ。まばゆいばかりのダイヤモンドが、ぎっしり詰まっていたのである。

江原はその一粒をつまんで、かざして見た。

「すげえ！」

「粒も大きいな」と浅田が言った。「何カラットあるかな？」「おれはダイヤのことなんか知らねえ」江原はぶっきら棒に言った。

「おれの知ってるのは、商売の電気器具だけだ」

伊藤も商売の繊維製品以外には、とんと不案内であった。しかし、その形といい光り具合といい、見事なダイヤであることにまちがいはない。

「大丸で一粒七十万のやつがあった」

と浅田が言った。山男の彼にとって、ダイヤの知識はその程度であろう。

「ざと百粒以上はいってる」江原は溜息

をついた。「十粒で七百万、百粒で七千万……いや、一粒十万としても千万以上だ……」

「とにかく大したもんだ」と浅田が言った。「どうする？」と江原がきいた。

「どうするって？ 早く降りて連絡せにやいかな。遺体を収容するのが第一だよ。遭難の通報は登山者の義務なんだ」

「このダイヤはどうするってきいてるんだよう？」江原がさげすんだように言った。



「沈んだ欲望」(続々)

「そりゃ、もどおりにしといたほうがいいよ」浅田はしばらく考えてから「しかし貴重品だから万……」

「おれたちが持つて行ってやろう」
薄笑いをうかべながら、江原は言った。
「そうするか」

浅田はなんのわだかまりもなく賛成した。
やがて、例の難所にさしかかった。

「ひでえところだな」これから行くとする
断崖の道を眺めて、江原は立ちどまって一息
ついた。浅田はさきに歩いて行った。

江原は首にかけたタオルをおもむろにはずし、
その両端をぐっと握りしめた。満身の力をこめ
て、そして、足をしのばせて、浅田のうしろか
らおどりかかった。

浅田の首にまきつけたタオルをゆるめると、
江原は一步とびさがった。浅田は崩れるように
倒れ、そこにながながとのびて横たわった。

「こいつは堅造だから、どうせ話がわからね
えだろうと思ってな」江原は浅田の死体を崖下
の急流に蹴おとし伊藤のほうをかえりみて、
「いいか、おれたちや飛行機の残骸なんて見ちゃ
いねえんだぜ、わかったな？」

伊藤はぐくりと生唾を噛みこんで、辛うじて
うなずいた。

「ものわかりがいいじゃねえか、おめえさん
は。さ、さきへ行きな」

臆病者の伊藤が、断崖絶壁のあいだの狭い道
を、すたすた歩いたのは奇蹟に近い。彼は「自
然」への恐怖よりは、うしろの兇悪な「人間」
の殺意をおそれた。だから一尺幅の危険な道も
おそろしくはなかった。

江原の殺意に、伊藤は絶望した。それがあま
りにもあきらかだったから。そして、あまりに

も人間のおいがしすぎたから。彼ははじめて
「自然」を愛した。

「どうせ助からない！」

そう観念した時、彼はもはや臆病者ではなく
なった。歩いているうちに、彼は殺されるまえ
にするべきことがあるのを悟った。勇者のする
ことである。彼は落ち着き勇者に変貌した。

道の中で彼は立ちどまった。絶壁を仰いで
むきをかえ、そしていちど、断崖に目をおとし
た。ちつともこわいとは思わなかった！

猛烈な勢いで、彼は突進した。

行くてには、銀色のケースを恭々しく手にし
た江原がいた。彼はその目に言いしれぬ恐怖の
色をうかべた。生まれてはじめての恐怖かもし
れない。むろんそれが最後の表情だった。

はるか下で、二つの物体が岩にくだける音が
した。つづいて、かわいらしい小さな音、岩の
そばに流れのゆるやかな淀みがあった。墜落し
たとき、江原の手から離れたケースの蓋がひら
き、ダイヤがそこにまき散らされたのだ。清流
にきらめき泳ぐダイヤの群れ、美しかった。し
かし一瞬のち、清流も真つ赤に染まった。ダ
イヤは束の間の煌きをみせて、水底深く沈んで
行った。

ラフト中尉の夫人は甲子園の自宅で良人の遭
難をきかされた。彼女はテーブルにうつぶせて
泣き崩れた。凶報通知の辛い任を帯びて来たウイ
ルソン軍曹は、慰めの言葉もないまま、彼女の
そばに立ちつくした。弔慰金、保険金など合計
十六万ドルはいることなど、どうしてこの場で
口にすることができよう。――

未亡人は肩をふるわせ、涙のあいまに、とき
れとぎれに悲嘆の言葉を口からもらした。

「可哀そうなメリイ、パパはもう帰ってこな
い……あんなに可愛がつてくれたパパが……ク
リスマスのお芝居も観てもらえない……女王の
役をもらったのに……王冠を飾るきれいな模造
宝石を……東京で買ってきやるとあんなに約
束したのに……パパは……パパは」
もだえる彼女の手がテーブルの上を払った。
紙と綿で造った王冠が、カサと床におちて、こ
ろころとストープのそばにころがった。

(終)

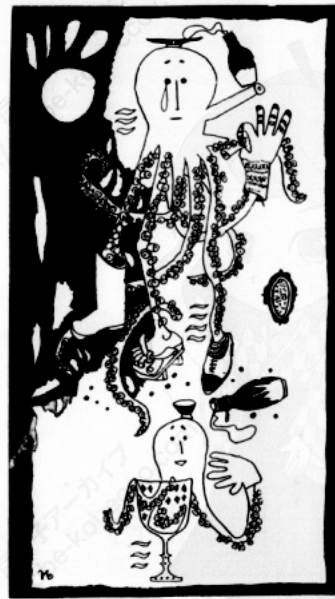


陳舜臣さんのこと
神戸出身。神戸を舞台
に中国人華商の生態を
描いた推理小説「枯草
の根」で第7回江戸川
乱歩賞受賞。

昭和18年大阪外語
(現大阪外大)インド語
科卒、終戦まで同校の
西南アジア語研究所の
助手、そのご泰安公司
勤務。蔡夫人と一男一
女がある。現住所は神
戸市生田区北野町一

■『陳舜臣さんを語る会通信』No. 111 及び 117-123 で
短編集未収録作品27作を報告致しましたが、こ
れらに、一作、「沈んだ欲望」が加わりました。

月刊『神戸っ子』10号掲載 司馬遼太郎氏のエッセイ

連載 第9回
ここに神戸がある司馬遼太郎
え 中 西 勝

気 楽 な 町

(傍線は加筆)

毎月一度は、「神戸っ子」の五十嵐恭子さんがさそいにきて、神戸へ出かける。これで九度目である。

帰りは、かならず元町の「蛸の壺」に立ち寄る。私は食痴だが、このたべものだけは、まずくない。それに、あるじの木村さんの適度のふあいそうさと、ぶの厚い微笑が、また賞味にあたいする。この木村さんというのは、北京でながく住んでいて、はなしが中国のことになると、多弁をおさえつつも多弁になる。とくに中国料理の知識にかけては、ちよつと、私の知りうるかぎりの日本人

のなかで、類がない。以前私の家内などは、木村さんのはなしに感嘆するのあまり店を出てから小声で、

「あのひと、中国人？」

ときいた。この人物は名代のあわて者だから私はこの種のことに馴れているが、中国フアンの木村さんにとっては、これほどうれしい間違われ方があるまい。

もっとも、長州（山口県）のひとだそうである。学校も山口高商の出身で、長州なまりがぬけない。……。

この日、「蛸の壺」に立ちよる前まで、私は神仙閣で神戸の華僑のあつまりにまねかれていた。推理小説「枯草の根」で江戸川乱歩賞をえた陳舜臣君の祝賀会で、九割が在留中国人の紳商である。

この紳商たちは、木村さんよりも流暢な日本語の発音でテーブルスピーチをした。しかもほとんどの話し手は、「われわれ華僑から作家を出した」とはいわず、「われわれ神戸っ子から作家を出した」という意味のことをいってよろこんだ。おどろくべきことである。

そのあたりに、神戸という町のもつふしぎな魅力が指摘できるようにおもわれる。

木村さんにしてもそうだ。木村さんとその店の「蛸の壺」は神戸のもっとも神戸的なふんい気を中心の一つだとおもふのだが、亭主の木村さんが根っからの土地っ子ではない。

大阪や東京は、これからみるともっと閉鎖的で排他的である。道頓堀の「たこ梅」のおやじさんは傍若無人な人物だが、この人が生えぬきの大阪人であるというたつた一つの理由で客から許されているし、東京でもたとえば築地の魚河岸のすし屋などは、代々の江戸っ子でないと客は尊敬しな

いのだ。

神戸はそうでない。

みんなが、それぞれの個性を持ち寄って、町のふんい気をつくりあげている。木村さんが長州弁まるだしいかにも神戸、といった店をつくってしまっているし、華僑も、華僑意識以前に神戸っ子意識がつよいのである。

つまり、町が気楽にできているのだ。だれも土地っ子であることを誇らないし、誇るのは無意味だとおもっている。みんながこの町の自由さを愛し、個性をまるだしにして暮らしている。

そういうキサクさがこの町の魅力なのだ。「そうやないか」

と五十嵐さんにいうと、このお嬢さんのクセで、たてつづけにうなづき、「そうです、そうです、そうです」とうれしそうに答えてくれた。

(作家)



忘れた日本語を思い出すうまい方法とは（『神戸っ子』11号）

新春随想集



初春に想う

陳 舜 臣

お正月が一番嬉しいのは、子供達である。年をとるにつれて、新しい年を迎える感激は、だんだん減るものらしい。仕事や身の雑事やらが気にかかって、新春の悦びに心をまかせ切ることができないのであろう。

子供は一つのことですぐ熱中することができ、あんなふうに没頭できたなら、と子供達が羨しくなることがある。しかし、一つのことには夢中になると、彼らはほかのことをすっかり忘れてしまうものだ。大人は忘れたことが多いのに、悲しいかな、頭のなかから追いつくことがどうしてもできない。

まだ小学校にもあがらぬ頃、ぼくら一家は元町七丁目の路地に住んでいた。御多分に洩れず、日がな一日遊び暮したものだ。もちろん同年輩の日本人の子供達と同じくらい日本語がしゃべれた。ぼくら一家は全員神戸に移っていたが、それでも当時はまだ故郷の台湾とは頻りに往来した。ぼくたち兄弟もときどき帰郷した。ところが台湾へ帰ると台湾語ばかり使うものだから、短期間のうちに日本語を忘れてしまう。生活の本拠はすでに神戸にあるのだから、台湾にあまり長居もできない。帰郷といっても、せいぜい一と月か二た月だったろうか。それなのに、言葉をすっかり忘れてしまうのだ。神戸へ戻ってくると、はじめのうちは日本語がなかなか思い出せない。そしてものの一と月ぐらいうると、もとのようにしゃべれるようになる、こんどは反対に台湾語のほうを忘れてしまう。今から考えると、その速度のはいいこと、驚

くばかりである。一つのことには専念できたからであらう。そのかわり別のほうは、速かに忘れ去るのだ。

二つ年上の兄貴が小学校へ入る前、いちど旧正月に帰郷して、戻ってきたのが入学の直前だった。さあ困ったことになった。当時台湾人は日本籍だから、義務教育として必ず日本の学校へあがらねばならない。ところが、日本語をだいたい忘れていた。子供心にも兄貴はだいたいあせつたとみえ、いつもなら自然に覚えてしまうのにその時ばかりは積極的に学ぼうとしなかった。

ぼくたち兄弟が表通りへ出ようとすると、近所のいじめっ子に通せんぼされた。「そこ退（ド）け」という言葉がどうしても思い出せない。以前よく使ったはずの言葉だから、もう喉元まで出かかっている。それなのに今一と息というところでひっかかっているのだ。ぼくたちは歯ぎしりしながら家へ退却した。あと数日すれば入学式である。兄貴はしよげ返ってしまった。あんなときに使う言葉さえ忘れていたのだから、学校へ入ってから、困った困った、としきりに幼い頭を悩ませたのを覚えていた。

「そうだ、うまい方法がある！」

と、兄貴は台湾語で叫んで、目をかがやかせた。ぼくたちはまた連れ立って、こんどは鉄道線路のほうへ出た。まだ高架はなく、汽車が地上を走っていた頃のことである。鉄道に沿った道には砂利が敷かれてあって、荷馬車や牛車が往來していた。当時トラックはあまりなかったように思う。宇治川の踏切が閉まると、荷馬車が何台もならんで待っていた光景が、いまも記憶に残っている。

ぼくたち兄弟は、この砂利道に面した酒屋の倉庫の軒下で待っていた。そこへおこうから牛車が

ごろごろ音を立てながらやって来た。ぼくたちが待っていたのは、そいつだったのである。だいたい近づいてから、兄貴はやにわにその前へとび出した。

「こらっ、そこ退（ド）け！」

手綱をとっていたおっさんがどなった。

「わかった、わかった！」

兄貴は小おどりしながら駆け戻ってきた。ぼくもホットした。ついに「そこ退（ド）け」という言葉を思い出したのである！手をとりあって、ぼくたちは家へ引揚げた。何かの拍子に思い出してみると、じつに他愛のない言葉で、そんなのをど忘れしていたのが不思議でならない。二た月ほど前には、近所の悪童たちを相手に、さかんにこの「そこ退（ド）け」を連発したというのに。

子供の頃おぼえようと努力したのはこれ一回きりである。いつもしらすしらすのうちに会得してしまつたとみえる。ほかのことに心をわずらわされず、ただひたすら友だちと遊ぶことに没入できた結果にちがいない。

指折りかぞえてお正月を待つ子供達を見ると、ほほえましくなる。かえりみていたずらに馬齢を加え、世の煩瑣な営みに年あらたまる感激もともかく薄れがちなわが身が、なにか可哀そうでならない。何かに打ち込めば、子供のようにならねるだろう。お正月に心から嬉しそうな顔をしている人たちを、ぼくは尊敬したいと思う。そんな人へ、ぼくの目に何か一筋のものに生きているように見えるからだ。

（作家）

■この話は『青雲の軸』『道半ば』『私の履歴書』（日本経済新聞）『わが心の自叙伝』（神戸新聞）に記述があります。その原エッセイは『神戸っ子』に掲載された上述エッセイだったのでね。

『神戸っ子』(1991年3月号)掲載「『神戸っ子』と私の三十年。」

三十周年記念エッセイ

『神戸っ子』と私の三十年。

陳舜臣(作家)

絵／中西勝

(傍線は加筆)

『神戸っ子』は創刊三十周年を迎えたという。これは私が江戸川乱歩賞をいただいて、プロの作家として歩んできたのと、おなじ年輪というわけだ。『神戸っ子』では、それが三月号にあたるそうだが、私のプロ入り三十周年は、それではいつになるのだろうか？昭和三十六年十月に授賞式があったが、授賞の通知は、八月四日のことだった。忘れない生田神社の夏祭のときで、夕方、店から家に帰る途中、カバンの手提げの部分がはずれてしまった。

——もうサラリーマン生活はやめてよいということかな？

と思いながら北野町の坂を登って行くと、妻が坂の上で手を振っていた。授賞のしらせがあったと、さすがにすくなく興奮していた。じつは七月のはじめに、最終選考の五篇にはいったので、略歴を知らせよ、という連絡があったので、心待ちにしていたのである。

受賞作『枯草の根』は、四月半ばに脱稿した。五百枚の原稿を投函に行ったのは、生田神社の春祭の日のごとで、生田さんとは縁が深い。というよりは、神戸では生田さんが一種の暦になっているのだろう。

作家生活三十周年を祝うとすれば、脱稿投函の生田さん春祭か、受賞決定の夏祭、授賞式の秋祭

か、そのいずれかということになる。だが、ことさらに祝うという気持ちにはならない。ふりかえってみるというのは、大切なことかもしれないが、なにやら年寄めいて、おもしろくない。こないだ亡くなった井上靖さんで、私が感心するのは、いつ会ってもつぎの仕事の話をする事だった。

——つぎは孔子を書く。きみ、曲阜へ行ったかね？そこで、きみはどう思った？

と、たちまち取材される。井上さんが回顧談をされるのはあまりきいたことがない。

『神戸っ子』創刊の年の十二月号に、私は十枚ほどの掌篇小説のようなものを書いたおぼえがある。そして、つづいて、「新春雑感」を書けと言われて、ずいぶん人使いの荒い雑誌だと思ったものがある。



当時、『神戸っ子』の小さなオフィスは、国際会館一階にあり、立ち寄りやすかった。文化ホールがまだなかったの、神戸に来る芝居はたい

い国際会館だったので、芝居好きの私はよく通った。あのころでは、民芸の「火山灰地」、俳優座の「十二夜」(河内桃子がよかった)、文化座の「荷車の歌」、文学座の「国性爺合戦」などが記憶にのこっている。観劇の帰りにぶらりと『神戸っ子』に寄ると、おいしいお茶が出たものだ。

その年の十一月ごろ、私はラジオ関西で「ミステリーこぼれ話」というシリーズに、北野町から須磨まで信号なしで行ける道がありませ」と言われその道を通ったことがある。いまでは信じられないだろうが、すこしまわり道だったけれども、三十年前にはそんなノンストップコースがあった。

この一月の直木賞選考会で、直木賞史上最高齢の古川薫氏が受賞した。選考が終わり、しばらく雑談していると、別室の芥川賞選考会から、

——二十八歳の小川洋子さんにきまりました。

という報告があった。選考委員のジイさんバアさん(失礼)、思わずため息をついて、

——私たちが書きはじめたころ、まだ生れていなかったんだね……

どうやら話がまた回顧的になりかけたが、『神戸っ子』も私もそんな年になったというところである。どちらも、おなじ仕事を、ずっと休まずにつづけているところがすばらしいではないか。『神戸っ子』をほめるついでに、自画自讃させてもらおう。

■傍線の箇所、小説は「沈んだ欲望」で、本号一三ページに、「新春雑感」は五ページに転載させていただきました。